

(作品介绍) 伝土佐光起筆「源氏物語画帖」(長崎・個人蔵)について  
『源氏物語絵詞』と脇息上の絵を見る浮舟

*Picture Album of the Tale of Genji* by Tosa Mitsuoki in the Private Collection in Nagasaki prefecture:

A focus on the Scene of Lady Ukifune Appreciating a Picture on an Armrest

本田光子

HONDA Mitsuko

This paper presents *Picture Album of the Tale of Genji* by Tosa Mitsuoki in the Private Collection in Nagasaki prefecture. This album includes two volumes. The first volume embodies 26 stories and the latter volume embodies 28 stories in a chronological order. Each story includes a picture and a short extract without signature. The pictures are painted primarily using ink with some gold and colors.

Certain scenes from the *Tale of Genji* are painted frequently; however, this album is unique in that it focuses on rarely depicted scenes and demonstrates the details of the story.

The scene of Lady Naka-no-kimi comforting Lady Ukifune and letting her show a picture is of particular importance. In almost all of the paintings detailing this scene, a picture is on the floor; however, this album places the picture on the armrest following the extract.

This passage cannot be found in general *Genji* texts but *Genji-mo-nogatari-zu-ekotoba*, which are manuscripts suggesting the scene

that should be painted. This album is significant because the picture reveals a concrete connection with the *Ekotoba*.

The painter is presumed to have been a student of Tosa school possibly between the mid 17th and 18th century. This album reflects the aspects of the age when many people enjoyed the *Genji* stories in various works.

## 作品概要

本論は、絵を土佐光起と伝える、長崎在住の個人所蔵「源氏物語画帖」(以下、本画帖と呼ぶ)を紹介する。

表紙に「源氏五十四帖絵詞色紙帖 上」「同 下」と記す題簽を有する二冊の画帖からなり、絵と詞書の色紙(絵一七・一×一九・六センチ)を物語順に見開きで貼り合わせ、上冊には前半二十六場面を、下冊には後半の二十八場面を収める。絵および詞書の筆者を示す落款や署名は見当たらない。絵は色紙に団扇状の区画を墨書きし、その中に墨を主体とし淡彩と金泥を用いて描く。詞書は数手に分類でき、素地に金泥線で草花や山水をあしらう下絵の上に、いずれも行頭をほぼ揃えて数行でしたためている。なお、九帖「葵」と二十二帖「玉鬘」の詞書のみが入れ替わり貼付されている。

以下、末尾に掲載した場面一覧表を合わせて参照されたい。

### 一、特異な場面選択

『源氏物語』が絵画化される時、しばしば特定の場面が選ばれて繰り返し描かれ、構図やモチーフといった図様が定型化し、流派内で継承されることが知られている。その様相は、秋山光和氏や田口榮一氏により「源氏絵帖別場面一覧」としてまとめられたが【註一】、本画帖は一覧に記載がなく、類例の少ない場面が複数選ばれている。それらには新規に考案された構図と、定型化された構図をほぼそのまま用いて前後の場面を描くものがある。

珍しい場面のうちいくつかは、近世前半に生み出された大部の源氏絵の作例のうちに共通する場面選択が見られる。二二六もの挿絵から

なる慶安三年(一六五〇)刊行の詩絵師山本春正による『絵入源氏物語』(以下、絵入本と呼ぶ)と、四〇〇場面を描く「源氏物語画帖」(石山寺蔵。以下、石山寺本と呼ぶ)である。一覧にない場面のうち、まずはこの二作と本画帖との共通場面を挙げ、つづいて本画帖のみに見出せる希少な場面を見ていきたい。

絵入本は、『源氏物語』の絵入り版本として最初のものであり、かつ全文に濁点や振り仮名等を付し読みやすく、啓蒙的な性格で版を重ねて広く受容された。春正による挿絵は本文を尊重し、当時の注釈に基づき絵画化に特徴がある【註二】。本画帖と共通する珍しい場面は、「紅葉賀」「柏木」「竹河」「橋姫」「浮舟」「手習」である。なかでも「浮舟」は、本画帖の詞書は匂宮が男女の寄り添う絵を描く場面だが、絵はその後の浮舟が匂宮から渡された筆をとり手習いする様を描き、絵入本と共通する【図1】。

石山寺本は、人物は土佐風に、樹石等は狩野風に描くいわば折衷様式による江戸時代中期の作とされる【註三】。各図には場面を説明する付箋状の札がつけられ、本文に加えて注釈書の知識が取り込まれている。両画帖で共通する場面は、絵入本とも重複する「紅葉賀」「柏木」に加え、「帚木」「夕顔」「葵」「少女」「椎木」「宿木」である。「少女」は源氏と朝顔の君の文のやり取りを描くが、石山寺本は源氏を描き【図2】、本画帖は朝顔の君を描く。

主に中世から近世はじめの作例を集めた「源氏絵帖別場面一覧」に立項されない場面でも、絵入本・石山寺本と共有するということは、本画帖の制作期が多様な源氏絵が描かれる時期に入ること示す。とともに二作例が数百という場面を絵画化する中で本文や注釈書を踏ま

えて新たな場面を絵におこしたのに対し、各帖一場面ずつを描く本画帖では珍しい場面の選択が意識されていたことが浮かび上がる。

ただし絵入本・石山寺本と本画帖は画風のひらきもさることながら、同じ場面を選んでいても構図やモチーフなど描写上の違いも多く、互いの関係はもとより直接的なものではない。石山寺本については片桐弥生氏が、『源氏物語絵詞』という物語の中から絵画化に適した場面を各帖数か所ずつ選び出し、描くべきモチーフと本文の一部を併記する源氏絵作成の手引書の一種との親近性を指摘している〔註四〕。こうした手引書が本画帖でも参照された可能性については後述する。

さらに絵入本・石山寺本にも含まれず、今のところ類例作が見つからない場面は「若紫」「花宴」「明石」「薄雲」「行幸」「匂宮」である。このうち例えば「若紫」は、女君に硯箱と雛人形が添えられており、一見すると源氏に二条院へ引き取られた紫の上が手習や雛遊びをして過ごす場面に見える。しかし詞書を読むと、源氏が紫の上に出会った北山逗留から帰る頃、紫の上が絵を描いたり雛遊びをするときに、「これは源氏の君」と言って綺麗な衣を着せる場面である。これに合わせて、絵は女君が筆をとり、邸外には北山を表わす桜と滝が描かれている。また「薄雲」は、源氏が大堰にいる明石の君のもとへと出かける際、明石の姫君が裾にまわりつく場面がしばしば選ばれるが、本画帖では源氏が出て行ったあと紫の上が明石の姫君に乳房を吸わせてあり、それを見て語り合う女房たちを描く。構図は、堺市博物館所蔵の土佐派色紙などで源氏が出かける場面【図3】をほぼそのまま用いており、紫の上は御帳台の中にいる。

こうした珍しい場面には互いに共通性を見出せず、物語の進行のう

えて重要な場面とも思われなため、新しい源氏絵の享受というより他の積極的な選択理由は今のところ不詳である。

## 二、本文の忠実な絵画化

本画帖は、本文の描写に沿って忠実にモチーフを絵画化している。一方で、定型場面における定番のモチーフを描かずに省く例もあるため、これを先に見ておくと、「篝火」は源氏と玉鬘が琴を枕に添い伏して池畔の篝火を見ながら歌を交わす場面だが、篝火が描かれていない。「梅枝」は朝顔の君から届いた薫物の壺二個が頻出のモチーフだがそれを描かず、詞書にある梅の枝と文のみを描いている。

さて「須磨」で源氏が手にする黒檀の数珠、「朝顔」で大きく描かれる雪をかぶった松と竹、「藤裏葉」で夕霧と雲居雁が眺め、和歌に詠みこむ三条邸の庭の遣水、「若菜上」で袖に梅の枝を隠し持つ源氏、「御法」で特別にしつらえられた明石の中宮の座敷は、いずれも他作例では省かれたり簡略に描かれがちなモチーフを本文にしたがい克明に描くものだ。なかでも六条院の春の船楽を描く「胡蝶」では童頭鶴首の船の棹をさすみずらを結った女童、苔むした池の中の小山と船を挟んで、細い枝を加えて飛び交う水鳥を描きこむ。こうした細かなモチーフは、全て詞書前後の本文に記される。他にも「幻」は同じ場面の浄土寺所蔵「源氏物語扇面貼付屏風」の一図が蓮葉のみを描くのに対し、満開の蓮花と蜚、さらに詞書につづく本文に出てくる庭先の撫子を描き添える。「夢浮橋」は薫一行のみがしばしば描かれるが、それを遠くに眺める浮舟と尼君たちに加えて、詞書の直前に記される、昔を思い出す慰めである池に飛ぶ蜚をも描く。

詞書の内容に焦点を当てた絵画化も特徴的である。「末摘花」は常陸宮邸に忍んだ源氏と、身をやつした頭中将を描く。多くの類例作では、二人が会う前の出来事である邸内で琴を弾く末摘花を合わせて描くが、本画帖は格子が下されて姫君の姿はない。これは詞書の前で、源氏の手引きをした命婦が末摘花の琴演奏の後すぐに格子を下ろしたためであろう。「野分」では、夕霧が明石の姫君のもとで雲居雁へ手紙を書く場面を選ぶ。他の作例では夕霧が筆を手にしたためた姿が描かれるが、本画帖では詞書に「筆の先うち見つ」とあるとおり夕霧は筆の先を見つめている。

### 三、脇息上の絵を見る浮舟と『源氏物語絵詞』

こうして本画帖には、詞書と、その前後の物語本文を他例よりも忠実に絵画化する姿勢がうかがわれる。なかでも注目されるのが、五十帖「東屋」で中の君が浮舟に絵を見せて、右近に物語の詞を読ませながらさめる場面である。ここで浮舟は脇息の上に絵巻を広げて見入っている【図4】。他作例では絵は床に置いて広げており、脇息を用いる作例は他に見出せていない。なお石山寺本は異例で、机上に詞書を広げてこれを右近と浮舟が挟む。

この特異な描写は、詞書の「火としてけうそく(脇息)のうへにひろげ見給」(括弧内は論者による補足)という一節に従うものである。ところがこの箇所は、一般的な『源氏物語』のテキストには出てこない。その依拠するところを探すと、前述の『源氏物語絵詞』(大阪女子大学・宮内庁三の丸尚蔵館蔵。以下、『絵詞』と呼ぶ)に共通する詞書を見いだすことができる【註五】。

『絵詞』は前述のとおり、源氏絵作成の手引書の一種である。類書より抜きん出て多い二八〇余の図様指定を含むことから注目されてきた。大阪女子大学所蔵本は後陽成天皇宸筆の伝承を持ち慶長頃の写本と推測され、宮内庁本は元禄頃の写本と考えられており、両者の記述に相違が見られることから研究上は相互補完的に参照されている。原本は室町時代末期と推測され、その頃までに描かれていた源氏絵を集めたものと考えられる。源氏絵の現存作例には見られない場面も多く、実際に描かれていたのか疑問視する向きもあったが、室町時代の作例が次第に紹介されるようになり、その中には『絵詞』と共通する場面が含まれることから見直されている【註六】。

『絵詞』から「東屋」の図様指示とこれに続く詞書を引用してみよう。「同(あつまや)」

右同時也中君うき舟をめしてそばにをきいろくのゑなとけうそくのうへにひろけて右近にことばよませあふら火ちかくとほし中うき舟さしむかいみ給ふ也

ゑなととりいてさせて右近にことばよませてみしかく火ともしてけうそくのうへにひろけてものはちもえしあへす心に入て見給へるほかけさらにこゝとみゆる所なくこまやかにおかしけなり」

本画帖の詞書と比較すれば、細部の表現は若干異なるものの、脇息の上に絵を広げるようにとの指示と詞書は共通する。そしてこの箇所は、『絵詞』を紹介した清水好子氏も物語本文に見当たらないとして特に指摘している【註七】。『絵詞』に記される、物語本文に出てこないモチーフについては、例えば「葵」の碁盤について、注釈書や中世

に行われていた儀礼に基づくことが指摘されている〔註八〕。協息上で絵を見ることについては、注釈書類にも見出せておらず、今後も調査を継続したい。

同様に、本画帖の特異な場面である「夕顔」「紅葉賀」「薄雲」「匂宮」なども、『絵詞』と詞書が一致する。本画帖全体では、『絵詞』と一致する詞書は、部分的なものも含めると二十二にのぼる。絵入本の挿絵と『絵詞』を比較対照した吉田幸一氏は、前者の約六割の場面が一致することを、両者の関係は直接的なものではないと解釈した〔註九〕。本画帖においても、例えば「夕顔」では『絵詞』が源氏を「川のつゝみの辺にて馬よりをり給」と指示しながら、本画帖の絵は源氏が騎乗のままであるなど、両者には相違も多く見られる。しかし極めて珍しい「東屋」の一節が共通することから、本画帖と『絵詞』の関与を認めたい。関与のあり方について、『絵詞』を参照したのか、あるいは『絵詞』生成の折に参照された作品の系譜を引くのかは、今確認できる資料からは判別し難い。

#### 四、絵の作風と詞書

場面選択の傾向や構図は、土佐派・住吉派の系列が比較的多いようだ。土佐光吉に連なる図像として、「松風」「薄雲」は堺市博物館所蔵の土佐派色紙と、前者は同場面を、後者はほぼ同じ構図を描いている。堺市博色紙は光吉門下の長次郎が光吉周辺の絵師の作とされ〔註一〇〕、光吉・光則系に類例があるという。

土佐光則が創出し、光起が継承した図様との関わりもうかがわれる。「空蟬」の場面は、光則が「源氏物語白描画帖」（メトロポリタン美術

館パーク・コレクション）で初めて絵画化したとされる〔註一一〕。「濔標」の源氏と六条御息所の語らう場面は、光則の「源氏物語画帖」（徳川美術館蔵）〔図5〕のみが同場面を描く。ただし光則は御息所を源氏の横に位置させている。本画帖は両者を几帳で隔て、御息所の奥に前斎宮を描くなど、より本文に合わせて描く。「総角」もまた、光則が徳川本画帖やフリア美術館所蔵の白描色紙で、光起が個人蔵の画帖で同場面を描くが、光則・光起の作例では薫が階を登り切つて匂宮と同列に居る。本画帖は高欄にもたれる匂宮と、階の途中に座る薫を描き、詞書本文の通りである。「花散里」の作例も土佐派に多く、とりわけ個人蔵の土佐光起筆画帖〔図6〕とほぼ同じ構図・図様である。

さらに「蛩」で詞書の後方に出てくる硯を描く点は田口氏によると住吉具慶の独創であり、住吉派に若干の類例があるという〔註一二〕。描写について確認すると、本画帖には絵を土佐光起とする伝承がある。同じく白描を主とし、土佐光起の署名を有する「源氏物語画帖」（永青文庫蔵）は、淡墨の樹石や細緻な描写に父光則の白描作品との近さが見出されながら、光起の署名に拙さが指摘され、光起周辺作家の作であることが示唆されている〔註一三〕。永青文庫本の描写は掲載誌を参照いただき、ここでは描写が近似する光則の作例を代わりに挙げて本画帖と比較する。下ぶくれの顔、つり目、「く」の字形の鼻という本画帖の顔貌表現〔図7〕は、光則はじめ土佐派の作風の範疇であり〔図8〕、自分の低い者をやや卑俗な表情で描く点〔図9〕は土佐派の描法に近い。ただし光則・光起の品格のある表情とはやや趣が異なり、衣服の陰影や精緻な文様への関心も比較的低い。淡墨による草木の描きこみ、岩の点苔、雪を被った松の葉叢の半円形を重ねる形や

水流が岸边に沿い凍る描写【図10・11】などは類似しつつ、画風の懸隔もまた大きい。とりわけ本画帖の細線を連続させて形づくる幹と大ぶりの花からなる梅の樹姿【図12】は、光則・光起の優雅で瀟洒な枝ぶり【図10】との違いが明瞭である。

同時に、光則や光起の白描源氏物語色紙に感じられる、気品と裏合わせの一種の冷たさは本画帖は無縁である。葎など建具を精緻に描き込むゆえの理知的な印象や、画面に占める人物の面積が小さいことに起因する覚めた雰囲気は本画帖には見られず、高い俯瞰構図から人物に近づき寄る視点、愛らしい顔貌表現からは、通り一遍ではない物語への親しみさえ感じられるのである。これまでに絵画化されたことのない場面を描くにあたり、物語本文に取り組んだ制作者そして描き手の姿勢は、本文を逐語的に描きながら説明的描写に陥らないあたたかさを感じさせる。それが由緒ある図像を継承する土佐派正系からの距離をもまた示しているのであろう。

なお本画帖には、繊細に描きこむ場面と、描写が騰揚であっさりとした場面が混在する。後者は物語後半に増えるようだが、分類できるほど明確ではない。描き手の違いと捉えることができるか即断はできない。

最後に、何手かに分けられる詞書の書について、正確な分類は論者には困難であるが、十二から十八帖、三十二から四十三帖、四十四から五十二帖あたりはやや特徴的である【註一四】【図13】。あるいは一人当たり十帖程度を分担したものかもしれない。十七世紀以降に頻見される意匠的な散らし書きを採用せず、行頭をほぼ揃える点など、やや古い形式といえよう。あるいは古い詞書を写したのものかもしれない。

そうであれば行頭を揃える形式から、もとの詞書は絵巻の形状であった可能性も考えられる【註一五】。

#### まとめ 本画帖の位置付け

本画帖は土佐派の図様を用いつつ、本文を読み込み『絵詞』を利用しながら新規図様を生み出し、細部のモチーフまで忠実に絵画化しており、作風から土佐派周辺の絵師による、十七世紀半ばから十八世紀あたりの制作と推測される。

もとより詞書とその前後の本文を読み込み絵画化することは、石山寺本にも共通し、近世の源氏絵の性格とされる。一方で石山寺本は源氏絵場面集といった趣であるのに対し、本画帖は淡彩や金泥の使用にも見られるとおり觀賞用として制作されている。従来より知られている有名な場面を味わうとともに、近年では描かれることが稀ながらかつて描かれていたであろう図様や、新たに作り出された珍しい場面を楽しむみたいという源氏絵への期待に応える作品である。制作背景や関わった人物など不詳な点は多いものの、源氏絵の需要が増し、多様な作例が描き出される時期の様相をよく反映する点で、そして『源氏物語絵詞』との関係を具体的にうかがわせる点で、本画帖は意義深い作品なのである。

〔註〕

- 一 秋山光和『日本の美術—一九源氏絵—』至文堂、一九七六年。田口榮一『源氏絵屏風帖別場面一覽表』、『日本屏風絵集成五人物画 大和絵系人物』講談社、一九七九年。同『源氏絵帖別場面一覽』、『豪華「源氏絵」の世界』学習研究社、一九八八年。
- 二 清水婦久子『近世源氏物語版本の挿絵』、『講座平安文学論究 第八輯』風間書房、一九九二年。
- 三 片桐弥生・石山寺蔵『白描源氏物語画帖』について—源氏絵場面集の一例として—『講座平安文学論究 第八輯』風間書房、一九九二年。
- 四 前掲註三。
- 五 清水好子『源氏物語絵画の二方法—新資料「源氏物語絵詞」紹介—』、『国語国文』三〇九、一九六〇年（再録『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会、一九八〇年）、玉上琢弥『源氏物語絵詞について』、『女子大文学国文編』一九、一九六七（大阪女子大学国文学科）、片桐洋一・大阪女子大学物語研究会編著『源氏物語絵詞—翻刻と解説—』大学堂書店、一九八三年。
- 六 前掲註三、五七頁および同論文の註一三。
- 七 『絵詞』は大部分が肖柏本に一致するが、「東屋」は欠本であり、他本のうちでは池田本・国冬本に近いものの、いずれにもこの箇所は含まれないという。前掲註五清水論文、一四頁。
- 八 伊井春樹『源氏綱目』の挿絵』、『講座平安文学論究 第八輯』風間書房、一九九二年、一四五頁、片桐弥生『美術史における源氏物語—源氏絵の場面選択と図様の問題を中心に—』、『源氏物語研究集成 第一四巻 源氏物語享受史』風間書房、二〇〇〇年、三二一—二八頁。
- 九 吉田幸一『絵入本源氏物語考』上、青裳堂書店、一九八七年、一九二頁。
- 一〇 稲本万里子『堺市博物館蔵 源氏物語図色紙』、『国華』一二三、一九九七年。
- 一一 前掲註一『豪華源氏絵の世界』解説による。
- 一二 前掲註一『豪華源氏絵の世界』解説による。
- 一三 三宅秀和『土佐派色紙絵付源氏物語の概要』、『季刊永青文庫』二〇〇九年年度冬号、徳岡涼『熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵松花堂昭乗筆「源氏物語」について』、『実践国文学』八九、二〇一六年、水野裕史『美術のこみち（五）煌びやかな源氏物語の小品「土佐派色紙絵付源氏物語」』、『永青文庫蔵』、『Kunamoto: 総合文化雑誌』一九二、二〇一七年。

- 一四 「桐壺」は打ち込みが明快できびきびした筆使いを見せるが、十二から十八帖は柔らかくふるえるような字体で連続とかなを連続させ、漢字を大振りに書き、中でも数字を太くする。三十二から四十三帖は一文字ずつを離して書く傾向にある。太く書き始め、次第に細くなるようだ。四十四から五十二帖は一文字が大きく、全体的に濃く太く、動勢や力強さを感じさせる。
- 一五 稲本万里子氏のご教示による。

〔図版出典〕

- 図1 吉田幸一『絵入本源氏物語考』中、青裳堂書店、一九八七年。
- 図2 中野幸一編集『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』勉誠出版、二〇〇五年。
- 図3・6 秋山虔・田口榮一監修『豪華「源氏絵」の世界』学習研究社、一九八八年。
- 図4・7・9・11-13 伝土佐光起『源氏物語画帖』（個人蔵）は調査時に撮影した。
- 図5 榎原悟責任編集『江戸名作画帖全集五 土佐・住吉派 光則・光起・具慶』巽々堂出版、一九九三年。
- 図8・10 The Metropolitan Museum of Art, New York.

〔付記〕

本稿は、論者が研究分担者として携わる科学研究費基盤B「オントロジーに基づく源氏データベースを共有・活用した源氏絵の総合研究」（代表者：恵泉学園大学 稲本万里子）の研究成果の一部である。

作品の紹介および図版掲載について、ご所蔵者様のご厚意に心より御礼申し上げます。作品調査では、東京工業大学名誉教授・小長谷明彦先生、恵泉学園大学教授・稲本万里子先生、群馬県立女子大学准教授・三宅秀和先生にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

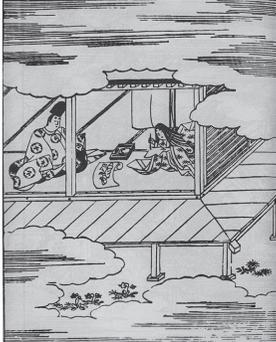


図1 山本春正『絵入源氏物語』浮舟

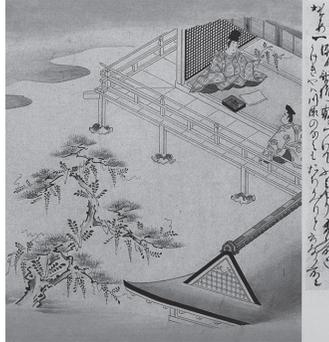


図2 「源氏物語画帖」少女 石山寺

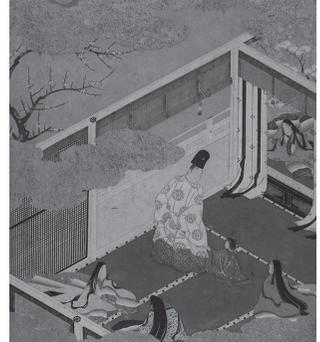


図3 土佐派「源氏物語画帖」薄雲  
堺市博物館

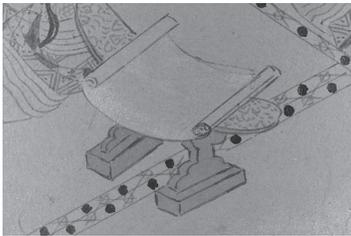


図4 伝土佐光起「源氏物語画帖」  
東屋部分 個人蔵



図5 土佐光則「源氏物語画帖」澤標  
徳川美術館

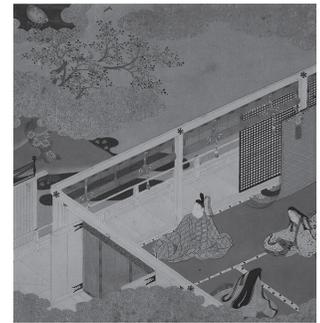


図6 土佐光起「源氏物語画帖」  
花散里 個人蔵



図7 伝土佐光起「源氏物語画帖」  
朝顔部分 個人蔵

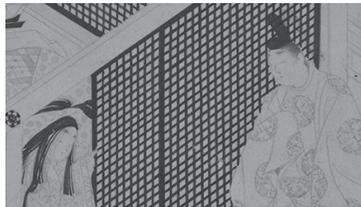


図8 土佐光則「源氏物語画帖」若菜上部分  
メトロポリタン美術館



図9 伝土佐光起「源氏物語画帖」  
賢木部分 個人蔵

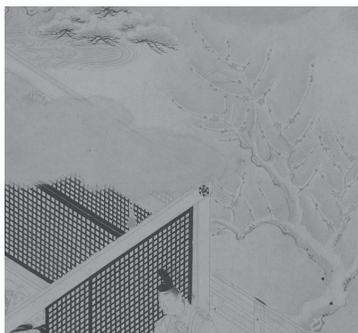


図10 土佐光則「源氏物語画帖」若菜  
上部分 メトロポリタン美術館



図11 伝土佐光起「源氏物語画帖」  
朝顔部分 個人蔵

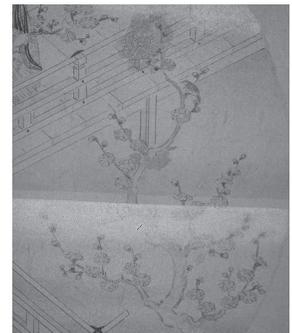
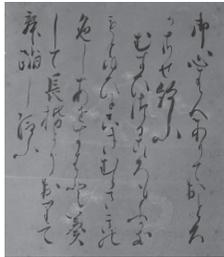
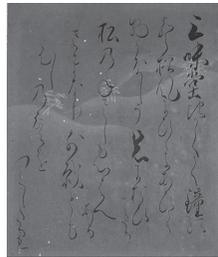


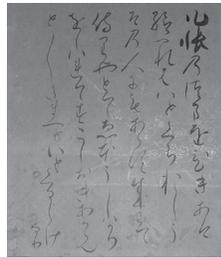
図12 伝土佐光起「源氏物語画帖」  
若菜部分 個人蔵



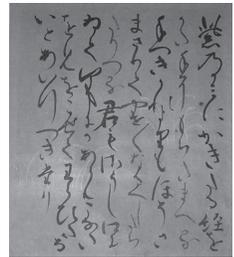
1 桐壺



13 明石



36 柏木



46 椎本

図 13 伝土佐光起「源氏物語画帖」詞書 個人蔵

伝土佐光起筆「源氏物語画帖」(個人蔵)場面一覧	
帖名	詞書(／は改行。句読点や鉤括弧、括弧内の漢字または仮名を補った。太字は大阪女子大学・宮内庁三の丸尚蔵館所蔵『源氏物語絵詞』との一致箇所だが、細部が異なる場合がある。) 絵(英数字は『豪華源氏絵の世界』「源氏絵帖別場面一覧」より。該当場面のないものは(該当なし)と表記。特徴的な描写を記した。)
1 桐壺	御心ばへありておどろ／かさせ給ふ。／「むすびつるころもふかき／もとゆひに、こきむらさきの／色しあせずは」と奏／して、長橋よりおりて／舞踏し給ふ。 1E 清涼殿にて源氏元服の儀式の後、加冠の祿として左大臣に帝より物を賜う。 ・元服後だが、源氏はまだみずらのまま。大袿を渡す命婦も描かれない。
2 帯木	わた殿に、中将といひしが／つばねしたるかくれに、うつ／ろひぬ。さる心して、人とく／しづめて、御せうそこあれど、／小君はたづねあはず。よろ／づのころもとめありきて、／わた殿にわけ入て、からう／してたどりきたり。 (該当なし) 源氏が空蝉と再び契ろうと、文を小君に持たせて姉を探しに行かせる場面。源氏が童と向かい合っている場面と、部屋から出て空蝉を探す小君、奥まった別室の空蝉が描かれる。
3 空蝉	かのぬぎすべしたるうす／衣をとりて出給ぬ。小君／ちかくふしたるをおこし／給へば、うしろめたう／思ひつゝ寝ければ、ふとおど／ろき戸をやおらあく。 3D 空蝉と取り違えて軒端萩と一夜を共にした源氏、帰ろうとして、東廂の障子口で寝入っている小君を起こす。 ・源氏は空蝉が脱ぎすべした薄衣を手にしている。奥の部屋に、空蝉と軒端萩が打っていた碁盤が描かれる。
4 夕顔	惟光も心ちまどひて、「我はか／ばかしくは、さの給ふとも、かゝる／道にいて出奉るべきかは」とお／もふに、いとゝ心あはたゝし／ければ、河の水に手をあら／ひて、清水の観音を念じ／奉りて、すべなく／おもひまどふ。 (該当なし) 夕顔の野辺送りの後、源氏が惟光に案内され東山に自ら赴いた、その帰路。鴨川の堤を行く馬上の源氏。惟光が川の水で手を洗って清水の観音に祈る。
5 若紫	そのちは、ひいなあそびにも、／えかひたまふにも、「源氏の君」と／つくりいでゝ、きよなるきぬ／きせ、かしづきたまふ。 (該当なし) 源氏が北山から帰る頃、紫の上が絵を描いたりひな遊びに「これは源氏の君」と綺麗な衣を着せて大事にしている。室外には北山の桜や滝を描きこむ。
6 末摘花	君は、誰ともえみわき給／はで、我と知られじと、ぬき／あしにあゆみのき給ふに、／ふとよりて、「ふりすてさせ／給へるつらさに、御おくり／つかうまつりつるは。／もろともに大内山は出／つれど入るかたみせぬいさよひ／の月」 6B 源氏、常陸宮邸に忍ぶと、身をやつした姿ですでに来ていた頭中将を見出す。邸内では末摘花、琴を弾く。庭前に紅梅。 ・ただし末摘花の姿は描かない。命婦が、末摘花の琴の後ですぐ格子を下ろしたためか。末摘花が眺めていた梅が欄干へと枝を伸ばしている。空には十六夜の月(満月の翌晩)。
7 紅葉賀	「いま、聞こえむ。思ひながらぞや」／とて、ひきはなちて出給ふ／を、せめてをよびて、「はしばら(橋柱)」／とらうみかくるを、うへ(主上)は／みうちぎ(御桂)はてゝ、みさうじ(御障子)／よりのぞかせ給けり。 (該当なし) 帝の整髪を終えた源内侍と源氏が戯れやりとりをする様子を、帝がのぞく。追いつがる源内侍、振り払って出る源氏。二人が取り交わした扇子は描かれない。
8 花宴	かのしるしの扇は、桜の／三重かさねにて、こきかた／にかすめる月をかきて、／水にうつしたる心／ばへ、めな(馴)れたれど、ゆゑ／なつかしうもてならしたり。 (該当なし) 臘月夜と交わした扇を手に取り眺める源氏。臘月夜の扇は桜(表が白、裏が蘇芳色の色目のこと)の三重重ねで、水に映る月を描いているという。源氏が手にする扇にも月が二つ描かれている。

9	葵	22 玉鬘の詞書が書かれている。 「火こそ、いとけさう(懸想)びたる／こゝち(心地)すれ。 おや(親)のかほ(顔)はゆかし／きものところき(聞)け。さも／おぼ(思)さぬか」とて、几帳すこし／を(押)しやり給。	(該当なし) 源氏、参賀の後、左大臣家を訪れて、亡き葵の上の産んだ息子夕暮と対面する。詞書のあと本文では、亡き葵の上の部屋が変わりなく、御衣掛の衣装が以前と同様に打ち掛けられており、大宮(葵の上の母親)が整えておいた源氏の装束や葵の上の女房たちが出てくる。絵にはその様を描いている。
10	賢木	さか木をいささかおりても(ち)たまへ／りけるをさし入て「かはらぬ色を／しるべにてこそいがき(斎垣)をもこえ／侍にけれ。さもこころうく」と／きこえたまへば／「神がきはしるしの杉もなき／ものをいかにまがへて／おれるさかきぞ」	10A 晩秋の野宮に六条御息所を訪ねた源氏、櫛の枝を御簾の中に差し入れ、歌を交わす。 ・櫛の枝は御簾の内側に描かれている。はなやかに差し出した月の光、黒木の鳥居、小柴垣、秋の花が描かれ、源氏は簀子にいます。
11	花散里	「いかにし(知)りてか」と忍びやか／にうちず(誦)じたまふ。／「橘の香をなつかしみ／ほととぎす花散る里／をたづねてぞとふ	11B 源氏、麗景殿女御(花散里の姉)のもとでも時鳥を聞き、昔話をしてから、花散里に会う。 ・定型通り。二十日の月、橘に時鳥、女御など。
12	須磨	雁のつらねて鳴く声、かち(楳)／のをとにまがへるを、うち／ながめ給て、涙のこぼるる／をかき払ひ給へる御手つき、／くろき御ずす(数珠)にはへ給へる／は古(故)郷の女恋しき人々、／心みななくさみけり。	12D 須磨の源氏、海の見える廊に出て、沖行く舟や雁の列を眺める。 ・定型通り。十五夜、海の時鳥の見渡せる廊、雁の連なり、沖を通る船、前栽の花。源氏は黒檀の数珠を手に経を読み、供人たちは源氏の優美な様を見て和んでいる。
13	明石	三昧堂ちかくて、鐘の／こえ(声)、松風にひゞ(響)きあひて、／物かなしう、岩におひたる松の根(根)ざしも、心ばへある／さまなり。前栽ども／むし(虫)のこえ(声)をつくしたり。	(該当なし) 八月十三夜、源氏が馬を降りて、明石の君の邸へ入ろうと歩くところ。月がはなやかに出、鐘の音が松風に響くという三昧堂が遠景に、源氏が乗ってきた馬と従者が堀の外にいます。岩に生えている松の根ざし、思わせぶりに妻戸口が開き月光が差し込む明石の君の邸宅。
14	霽標	やをら御几帳のほころびより／み給へば、心もとなきほどの／ほかけ(火影)に、御ぐし(髪)いとをかしう／げにはなやかにそぎて、よ(寄)り／み給へる、絵に描きたらむ／さまして、いみじうあはれなり。／帳のひむがしおもて(東面)にそ(添)ひ／ふ(臥)し給へるぞ、宮ならむかし。	14F 病のために出家した六条御息所を見舞った源氏、几帳の隙間より齋宮を垣間見る。 ・源氏と御息所間に帳台を描く。几帳の向こうに脇息に寄りかかる尼削ぎの御息所、脇に大殿。その奥に、帳台の東寄りに寄り臥し、頬杖をつく前齋院。
15	蓬生	御さきの露、むま(馬)の／むち(鞭)してはらひつゝいれ／たてまつる。雨そゞき／も、猶秋のしぐれ(時雨)めき／てうちそゞけば、「御かさ(傘)／さぶらふ。げに、木のした／露は、雨にまさりて」と聞こゆ。	15E 末摘花邸の蓬の生い茂る庭を、惟光に露を払わせながら源氏進む。 ・定型通り。名残の雨がぱらつき、月が出ている。目印となった、大きな松とその枝にかかる藤、崩れた築地。馬の鞭による先導、源氏に傘を差しかける惟光。庭には蓬が生い茂る。
16	関屋	関や(屋)より、さとはづれ出たる／旅すがたどもの、色々の／あを(襖)のつきづきしきぬい(縫)／もの(物)、くゞりそ(染)めのさまも、／さるかたにをかしうみ(見)ゆ。	16A 源氏、石山詣での途次、秋の逢坂の関で上京途中の常陸介・空蟬の一行に逢う。空蟬らは源氏の行列に道を譲り、木陰に車を引き入れて、行列を見送る。
17	絵合	かのたび(旅)の御日記のはこ(箱)をも／とりいださせ給て、このついでに、女君にも見せ奉り／給ける。御心ふか(深)くし(知)らでいま(今)み(見)む／人だに、すこし物思ひ知らむ人／は、涙お(惜)しむまじうあはれなり。	17B 源氏、絵合せのための絵を選び、紫の上に須磨の絵日記を見せる。
18	松風	御けうそく(脇息)によ(寄)りぬ／給ひて、御心のうちには、／いとあはれに恋しう／おぼ(思)しやらるれば、火をうち／なが(眺)めて、ことに物もの給はず。	18E 夜更け、紫の上のところにいる源氏のもとへ、明石の君の文が届く。源氏、読んでから紫の上にも見せ、脇息によって明石の君を想う。 ・詞書の通り、脇息にもたれ灯火を眺める源氏。
19	薄雲	ふところに入れて、うつ／くしげなる御ち(乳)をくゞめ給／つゝ、たはぶ(戯)れみたまへる／御さま、みどころおほ(多)かり。	(該当なし) 源氏が大堰にいたる明石の君のもとへ出かけた直後、紫の上が明石の姫君におっぱいを吸わせてあやしている。紫の上は御帳台の中にいる。その前に語り合う女房たちを描く。新春の頃、外には白梅。
20	朝顔	雪のいたうふ(降)りつ(積)もり／たるうへ(上)に、今も散／つゝ、松と竹とのけちめ／おかしうみゆる夕暮／に、人の御かたち(容貌)も光／まさりて見ゆ。	20D 源氏、女房らに御簾を巻き上げさせ、雪の降り積もった庭にさす月光を紫の上とともにみる。 ・照り渡る月のもと、遣水と、雪が降り積もり松と竹の姿の違いが面白く見える様を大きく描く。

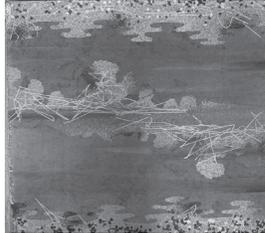
21	少女	「けふは、／かけきやは川瀬の波も／たちかへり君が御／そぎ(禊)のふぢ(藤)のやつれを」／紫の紙、たちふみ(立文)す／くよかに、藤の花／につけ給へり。	(該当なし) 朝顔の君が、源氏が寄越した藤の花を添えた見舞いの文を手に行っている。本文には立文とあるが、藤の枝に巻きつけてある。
22	玉鬘	※9葵の詞書が書かれている。 若君みたてまつり給へば、こよ／なうおよすけて、うちわら(笑)ひ／がちにおはするも、あはれや／まみ、くち(口)つき、ただ春宮の／御おなじさまなれば、「人も／こそ見たてまつりとがむれ」と／み給。	22E 源氏、几帳を押しやり初めて玉鬘を見る。右近、灯火をかきあげて近くに寄せる。 ・右近が押し開けた妻戸、几帳をめくる源氏、顔を横に背ける玉鬘、灯火をかき上げる右近を描く。
23	初音	「うす氷とけぬる池の／かゝみ(鏡)には世にたくひ(曇り)なき／かげ(影)ぞならべる」実(げ)に、めでた／き御あはひどもや(なり)。	23A 六条院の正月、源氏、紫の上と鏡餅の祝いをする。 ・鏡餅の祝いの後、夕方の源氏と紫の上との和歌の贈答を描く。鏡餅は描かない。詞書の前で、格別と出てくる春の御殿の庭を描く。池は和歌にも出てくる。女房の中には中将もいるか。
24	胡蝶	ちいさき山をへだ(隔)てのせ／き(関)に見せたれど、その山の／さき(崎)よりこ(漕)ぎまひて、東／のつりどの(釣殿)に、こなたの／わか(若)き人びと集めさせ／たまふ。	24A 六条院で春の船祭。花咲き誇る庭の池に竜頭鷁首の船。 ・舟で棹さすのは鬘を結った女の童。桜が咲き、苔むした池の中の小山(中宮方と紫の上方の中間に配し、関所に見立てた)と若い女房たちを乗せた舟を挟んで、細い枝を加えて飛び交う水鳥を描く。鴛鴦は描かない。舟の行く手には東の釣殿か。
25	螢	あつ(暑)かはしきさみだれ(五月雨)の、かみ(髪)／のみだ(乱)るゝもし(知)らで、か(書)き／給ふよ」とて、わら(笑)ひ給ものか／ら、「かゝるよ(世)のふること(古言)ならで／は、げに、何をかまぎ(紛)るゝこ／となきつれづれをなぐさ(慰)め／まし。	(該当なし) 長雨が続く毎日、玉鬘はこれまで見ることもなかった絵物語を書いたり読んだりしていると、源氏が訪れ物語論が始まる。筆をとるのは玉鬘か、それとも物語の上手な女房か。詞書の後に出てくる硯も描く。
26	常夏	「しばしもひ(弾)き給はなむ。聞／とる事(こと)もや」と心もとなき／に、此御こと(琴)にぞ、ちかくみ／ざり寄りて、「如何成(いかなる)風の吹／そひて、かくはひゝ(響)き侍るぞ」と／て、うちかたぶ(傾)き給へるさま、／ほかげ(火影)にいうつくしげなり。	26C 月のない夜、篝火をたかせ、源氏は玉鬘に琴を教える。玉鬘への恋慕つもの。 ・琴を挟む源氏と玉鬘。庭先に撫子。近くに控える女房たち。ただし、篝火は描かれない。
27	篝火	五、六日の夕月夜はと(疾)く／入て、すこし雲かくるゝ／けしき、荻のをと(音)もやう／やうあはれなる程に成に／けり。琴をまくらにて、も／ろ共にそ(添)ひふ(臥)し給へり。	27A 夏の夕、源氏、琴を枕に玉鬘に添い臥し、池畔の燃立つ篝火を見て歌を交わす。 ・ただし、篝火は描かれておらず、源氏と玉鬘は離れて伏している。五、六日(月初め)の夕月が早く西に沈むさまを描く。
28	野分	むらさき(紫)のうすやう(薄様)なり／けり。すみ(墨)、心とめておし／すり、筆のさき(先)うち見つゝ、／こまやかに(書)きやすらひ／給へるさま、いとよし。	28D 夕霧、明石の姫君のもとで、女房に料紙をもらい雲居雁へ手紙を書く。 ・詞書通りに、筆の先を見ている夕霧。硯箱には注意深く擦り上げた墨と、女房が硯箱の蓋に出した巻紙一本を描く。庭に控えるのは馬助か。
29	行幸	御かへ(返)りに、「昨日は、／うちきらし朝ぐもりせし／みゆき(行幸)には、さやかに空のひ／かり(光)やはみ(見)し。おぼつかなき／御事共になむ」とあるを、／うへ(上)も見たまふ。	(該当なし) 鷹狩りの翌日、宮中への仕出を尋ねる源氏の文に玉鬘が返歌(＝詞書の内容)。それを紫の上とともに見た源氏は、玉鬘へさらに返事を書く。玉鬘からの返事を見る紫の上を、詞書通りに描く。松には雪。
30	藤袴	宰相の中將、をな(同)じ色の、今／すこしまやかなるなを(直衣)／すがた(姿)にて、糸い(纓)ま(巻)き給へ／るすがたも、又いとなまめ／かしくきよらにておはし／たり。	30A 夕霧、源氏の使いで玉鬘を訪ね、藤袴の花を御簾より差し入れて、求愛する。二人ともに喪服姿。 ・ただし藤袴の花は描かない。御簾と几帳を隔てて座る夕霧の姿。女君は建物の端から少し見えるだけ。二人とも喪服姿で夕霧は纓を巻いている。
31	真木柱	姫君、ひわだ(椴皮)色のかさ(重)／ね、たゝいさゝかに書て、柱の／ひわ(干割)れたるはさまに、かうがい(笄)／のさき(先)してをし給ふ。／「今はとてやど(宿)かれぬ共(とも)／な(馴)れき(来)つるまき(真木)のはしら(柱)は／我をわす(忘)るな」	31C 冬の夕、母とともに家を去ろうとする髭黒の姫君(真木柱)、歌を書いた紙を柱の割れ目に差し入れ残しておく。 ・真木柱は笄を使っている。真木柱を挟んで向かい合うのは、邸に残る木工の君と、去る母親や中將のおもとか。この後女房が歌を詠み交わす。

32	梅枝	花をめでつゝおはする／ほどに、前齋院よりとて、／ち(散)りすきたるむめ(梅)のえだ／につけたる御ふみ(文)も(持)て／まいり。	32A 朝顔の齋院より源氏のもとに、紺と白の瑠璃の壺に 入れた薫物が松と梅の枝をつけて贈られる。螢兵部卿宮、 艶なさまに感嘆。 ・ただし朝顔の姫君からの薫物は描かず、その前に出てくる 梅の枝につけた文のみを詞書通りに描く。枝は二人の 間に、文は源氏の脇に置く。庭前には満開の紅梅。
33	藤裏葉	をかしきゆふぐれのほどを、ふた(二)所／なが(眺)め 給て、あさましかりし／よ(世)の、御おさなさのもの がたりなど／したまふに、恋しき事も／おほく、人のおも ひけむことも／は(恥)づかしう、女君はおほしい(出)づ。	33C 三条殿に移った新婚の夕霧・雲居雁が、大宮を偲ん でいるところ。 ・ただし雲居雁の父太政大臣が訪れる前を描く。大きく描 く庭は手入れされ、遣水に薄、大きく茂った木々と紅葉 を描く。遣水は夕霧と雲居雁の歌で邸の主人として詠ま れる。この後二人の前に参上する、古くからの女房たち が控えている。
34	若菜上	鶯のわか(若)やかに、ちか(近)き紅梅の／末に打鳴 たる、「袖こそほ(匂)へ」／と花を引かく(隠)して、 みす(御簾)をおし／あげて眺め給へるさま、夢／にも、 かゝる人のおや(親)にて、おも(重)き／くらぬ(位) と見え給はず、わか(若)うなま／めかしき御さまなり。	34D 雪の朝、源氏、梅の枝に文をつけて女三の宮のもと に贈る。端近で雪を見る源氏、梅には鶯、奥に紫の上。 ・梅は紅梅。端近に座る源氏は、手紙をつけた残りの枝を 袖で隠し持つ。
35	若菜下	さは、いとふくらかなる／程に成給て、なやましく／ 覚え給ければ、御琴もをし／やりて、けうそく(脇息) におし／かゝり給へり。	35C 六条院の女楽。明石の君は琵琶、紫の上和琴、明 石の中宮箏、女三宮は琴。源氏・夕霧も加わる。 ・詞書の通り、懐妊中の中宮が脇息にもたれて琴を押しや るさまを描く。庇の間をあげ放ち、褥を敷き並べる。簀 には笙と横笛の童二人と夕霧。月の出が近いので灯笼を 掛けている。
36	柏木	几帳のつまをひ(引)きあげ／給へれば、／「いとくちお(口 惜)しう、／その人にもあらず成にて／侍りや」／とて、 糸ぼうし(烏帽子)ばかり／をしいて、すこしおきあ がらむ／としたまへど、いとくるしげなり。	36C 夕霧、柏木を見舞う。柏木、後事を託す。 ・几帳の端を引き上げる夕霧。枕から起き上がり、白い衣 に烏帽子をかぶった柏木。上から夜具を引き掛けている。 邸の外には、柏木の昇進を祝うため馬が立て込み大勢の 供人が騒がしくしている様を一部描く。
37	横笛	風はだ(肌)さむく、物あはれる／にさそはれて、さう (箏)の琴をいと／ほのかにかきな(鳴)らし給へるも、 ／おくふか(奥深)きこゑ(声)なるに、いとど／心と まりはてて、なかなかにおも(思)ほ／ゆれば、びわ(琵琶) をとりによせて、いと／なつかしきね(音)に、「さう ふれん(想夫恋)」をひき／給ふ。	37D 秋、夕霧、落葉の宮を訪問、想夫恋を合奏。 ・曇りなく澄み切った空に月、前栽の花々を描く。庇の 間で琵琶を弾く夕霧、御簾の向こうに應對する御息所(落 葉の宮の母)と床に置かれた和琴。奥に箏を弾く落葉の宮。
38	鈴虫	十五夜の月のまたしかて／たる夕暮に、仏の御前に／宮 おはしまして、はしちか(端近)う／ながめ給て念ず(誦) し給。	38B 十五夜の宵、若い尼たち、仏に花を供え、端近くいる 女三の宮、鈴虫の声に耳を傾ける。 ・ただし、中秋の名月も鈴虫も描かない。念仏を唱える女 三の宮と、若い尼君たち。
39	夕霧	北のみさうじ(御障子)のと(外)にあざり／いでさせ給を、 いとようたどり／て、引とどめ奉りつ。御身は入はて／ 給へれど、御衣のすそ(裾)の残りて、さう／じ(障子) は、あなたよりさ(鎖)すべき方なかり／ければ、引き たてさせて、水のやう／にわななきおはす。	39A 小野の山荘を訪れ、以前からの思慕の情を落葉の宮 に打ち明けた夕霧、宮の居室に入り、逃れようとする宮 の御衣の裾を捉える。 ・御簾は巻き上げられている。室内に入った夕霧、落葉の 宮は襖の向こうにおり、夕霧は服に手をかけている。驚 き振り返る女房たち。
40	御法	「をくとみる程ぞはか／なきともすれば風にみだる／萩 の上露」げにぞ、おれかへり／とまるべうもあらぬ、萩 の露／もよそへられたる	40C 秋の夕暮れ、重病の紫の上、風に吹かれる前栽を見て、 源氏・明石の中宮と歌を交わす。 ・脇息にもたれ庭の萩を見やる紫の上を中心に、源氏と、 特別の座敷を設えて奥に座る明石の中宮。
41	幻	池の蓮のさかりを見給ふに、／「いかにおほかる」など、 まづおぼし／いでらるるに、ほればれしく／て、つくづ くとおはする程に、／日もくれにけり。	(該当なし) 紫の上の死後。盛夏に池の蓮の盛りを眺めて 追憶にふける。満開の蓮に螢が飛ぶ。すぐ後に出てくる 庭先の撫子を描き添える。
42	匂宮	御子の右衛門督、権中納言、／右大弁など、さらぬ上／ 達部あまた、これかれに／のりまじりて、いさか(誘) ひ／たてて、六条の院へおはす。	(該当なし) 賭弓に負けた薫がそつと退出しようとするの を引き止める夕霧。これから同乗して六条院の選擧へと 向かう夕霧の息子たち。同乗する牛車を右端に描く。
43	紅梅	「こころありて風のほはず／その(園)の梅にまづう むすの／と(訪)はずやあるべき」と、くれなゐの／か み(紙)にわかやぎか(書)きて、この君／のふとこ ろがみ(懐紙)に取りまぜ、を(押)し／たたみていたし たてたまふ	43B 大納言、紅梅の枝に文をつけ、宮中の匂宮に届ける ようにと若君に言いつける。 ・軒近くに紅梅。紅梅大納言と若君の間には、紅梅の枝と 和歌をしたためた文のほか、この手紙を人知れず隠す若 君の懐紙が置かれる。

44	竹河	もの見にまいりたる里／人おほくて、れい(例)より花／やかに、けはひいまめかき。わ／たどの(渡殿)の戸ぐちにしばしぬ／て、声き(聞)きしりたる人／に、物などのたまふ。	(該当なし) 男踏歌の夜、冷泉院が薫を連れて大君(玉鬘の娘)のもとへ訪れる。薫は女房へ話しかける。十四日の月が出ている。渡殿の戸口に立つ薫。以前応対に出た宰相の君が向かい合い話す。本文によると男踏歌を見物するために女房の実家の人々が来て泊まっている。
45	橋姫	すずり(硯)めして、あなたき(聞)／こえ給ふ。／「はし(橋)姫のこころをくみてた／かせ(高瀬)さすさほ(棹)のしづくに袖ぞ／濡れぬる ながめ給ふらむ／かし」とて、とのみ(宿直)人にも／たせ給へり。	(該当なし) 宇治を訪れて姉妹の姿を垣間見た後、薫が大君(八の宮の娘)とのやりとりの中で橋姫の歌を詠むところ。詞書の前に出てくる、舟に柴を刈り積んで行き来する様子を描きこむ。薫の脇に取り寄せた硯。控えているのは歌を取り次ぐ宿直人か。外には、後ほど薫を催促する、帰路用の車を用意した供人たち。
46	椎本	紫のかみ(紙)にかきたる経を、／かた手にもちたまへる／手つき、かれよりもほそ(細)さ／まさりて、瘦せ瘦せなるべし。たち／たりつる君も、さうじ(障子)口に／ゐて、何事にかあらむ、こなた／を見をこせてわら(笑)ひたる、／いとあい□(愛敬)つきたり。	(該当なし) 夏に宇治を訪れた薫が、姉妹の喪服姿を垣間見る。大君は經典を手に膝行し、中の君は立って振り返り待つ。屏風を引き退け、襖の穴から覗く薫。大君と中の君は客人から遠くの自分たちの部屋へ移ろうとしている。覗く薫の真向かいに襖が開いている。中の君は数珠を袖口に隠し持っている。風が吹いたので、几帳が全て二間の簾に押し寄せられている。
47	総角	はし(階)をのぼりもはず、／つみ給へば、「なを、うへに」／などもの給はで、かうらん(高欄)に／より居居て、世の中の御物／がたり(語)聞こえかはし給。	47B 匂宮、薫とともに勾欄により遣水に月の映る秋の庭を眺め、宇治の姫君たちへの想いを語り合う。 ・匂宮は高欄にもたれている。薫は階段の途中に座る。遣水に月が映る。前栽の草花や樹木。後で二人の和歌に詠まれる女郎花を描く。
48	早蕨	しめやかなるゆふぐれなれば、宮／うちながめ給て、はし(端)ちかくぞ／おはしましける。さう(箏)の御琴／かき鳴らしつて、例の、御心よせ／なる梅の香をめでおはする、／しづ(下)枝をおし折てまいり給へる、	48B 庭前の紅梅を愛でながら箏を掻き鳴らす匂宮のもとを訪れた薫、紅梅の枝を折り、匂宮に歌を詠みかける。 ・端近く箏を弾く匂宮、紅梅の枝を手に近づき薫。
49	宿木	いとけしきあるみ(深)山木に／やど(宿)りたる薫の色ぞまだ／のこりたる。こだになどすこし／ひきとらせ給て、宮へとお／ぼしくて、もたせ給ふ。	(該当なし) 宇治に来た薫、中の君への土産とする薫をとる。その直後の、弁の尼との和歌のやりとり。庭に色づいた薫、散り敷いた紅葉が本文通りに描かれる。中の君への土産の薫は邸外に控える供人が手にしている。
50	東屋	絵などとり出でさせて、右近に／ことば(詞)よませてみかき(たまふに、)火／ともしてけうそく(脇息)のうへにひ／ろげ見給にむかひても／はちもえしあへ給はず、心に／いれて見たまへるほかけ(火影)さら／に爰(ここ)とみゆる所なく、こ／まかにおかしげなり。	50B 中の君、絵を出して浮舟に見せ、右近に物語の詞を読ませる。 ・詞書にある通り、脇息の上に絵を広げている。他作例では見られない表現。絵も詞も巻子。灯火近くに座る浮舟、向かい合う右近。間に中の君。
51	浮舟	「心よりほかに、えみ(見)ざらむ程／は、これを見給へよ」とて、いと／をかしげなるおとこ女、もろ／ともにそ(添)ひふしたるかた(画)を／□(描)給て、「つねにかくてあらばや」／などの給も、涙おちぬ。	51C 春の日を浮舟とともに過ごす匂宮、男女が寄り添って臥している絵を描いて浮舟に見せる。 ・物忌と称して簾を全部おろしているはずだが、庭に面して巻き上げている。匂宮の前には手元に引き寄せてすさび書きをした硯が置かれる。浮舟の前には男女を細かく描きこんだ絵。浮舟は、匂宮から渡された筆をとり、手習いに和歌を記しているところ。
52	蜻蛉	しろきうすもの(薄物)の御ぞ(衣)き／(着替へ)給へる人の、手に氷をもち／ながら、かくあらそふを、すこし／ゑ(笑)み給へる御かほ(顔)、い(言)はむ／かたなくうつくしげなり。	52B 夏の夕暮れ、薄物を着た女一の宮や女房ら、氷を持って涼むようすを薫覗き見る。 ・女一の宮は白い衣を着ている。氷を手にしているのは女房。本文通りに女房三人と女童がいる。小宰相は扇を手にしている。細く開いた襖から覗き込む薫。いくつも立て違えた几帳を描く。場面は西の渡殿で池に面した釣殿の方なので、外に水面を描く。
53	手習	ごや(後夜)にあか(鬘伽)奉らせたまふ。下らう(臆)の／尼のすこしわかきがある、め(召)し出で／花をおらすれば、かことがましくち(散)るに、／いとどにほひくれば、／「袖ふれし人こそ見えね花の／か(香)のそれかどにほふ／はるのあけほの」	(該当なし) 出家した浮舟、新年に往時を回想しながら、若い尼に紅梅の枝を折らせる。閨(浮舟の居室)のつまに近く紅梅を描く。
54	夢浮橋	れい(例)の、はる(遥)かに見やらるる／谷の軒ば(端)より、さき(前駈)心ことに／を(追)ひて、いとおほ(多)うともし／たる火の、のどかならぬ光をみると、／あま(尼)君たちもはし(端)にいで居たり。	54B 浮舟たちのいる小野の里のはるか向こうの谷を、薫の立派な行列が通る。尼たちそれを眺める。 ・数多く灯した松明の灯。詞書の直前に、遣水に飛ぶ蛩を昔を思い出す慰めとする記述がある通り、池に蛩がたくさん描かれる。



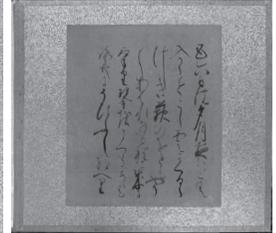
表紙



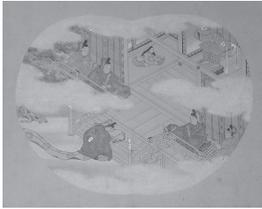
見返し



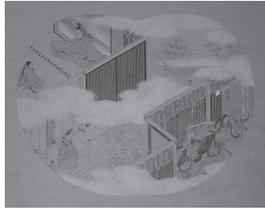
絵



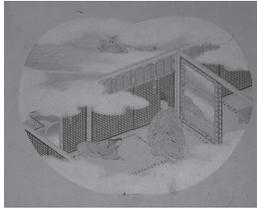
詞書



1 桐壺



2 帚木



3 空蝉



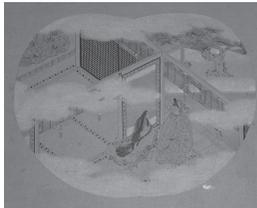
4 夕顔



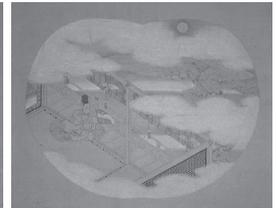
5 若紫



6 末摘花



7 紅葉賀



8 花宴



9 葵



10 賢木



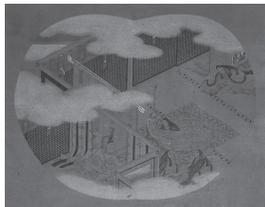
11 花散里



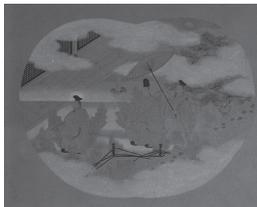
12 須磨



13 明石



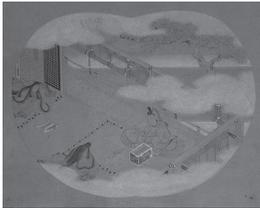
14 湍標



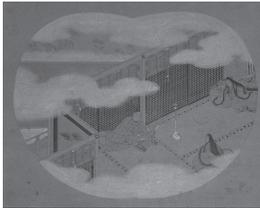
15 蓬生



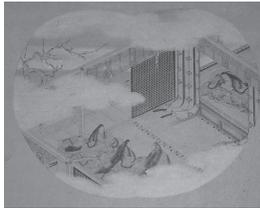
16 関屋



17 絵合



18 松風



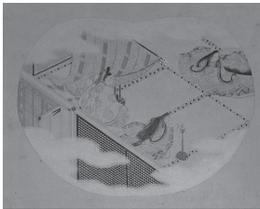
19 薄雲



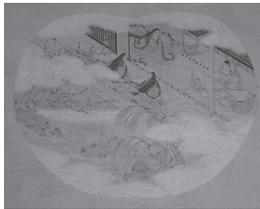
20 朝顔



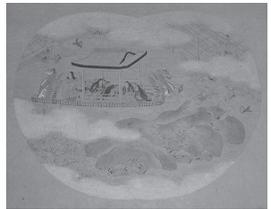
21 少女



22 玉鬘



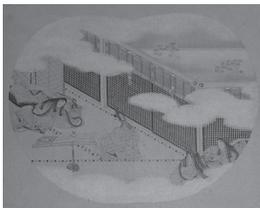
23 初音



24 胡蝶



25 蛩



26 常夏



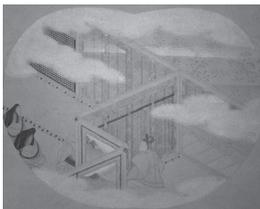
27 篝火



28 野分



29 行幸



30 藤袴



31 真木柱



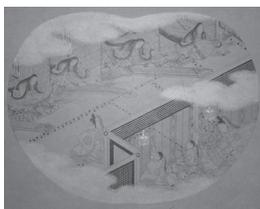
32 梅枝



33 藤裏葉



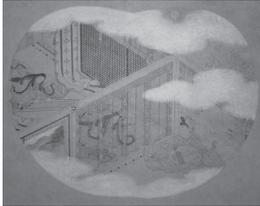
34 若菜上



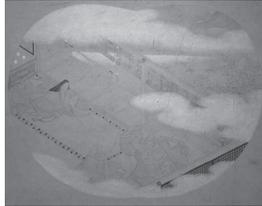
35 若菜下



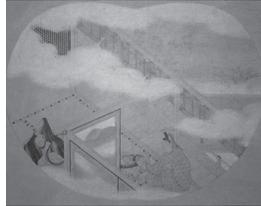
36 柏木



37 横笛



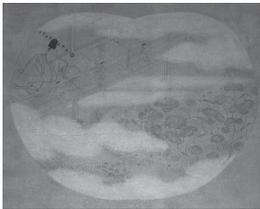
38 鈴虫



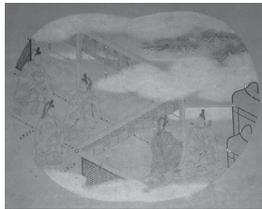
39 夕霧



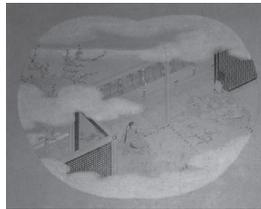
40 御法



41 幻



42 匂宮



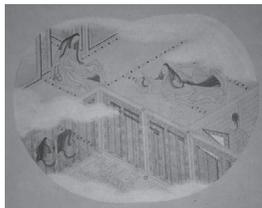
43 紅梅



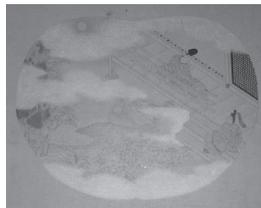
44 竹河



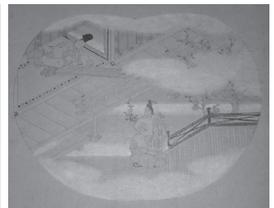
45 橋姫



46 椎本



47 総角



48 早蕨



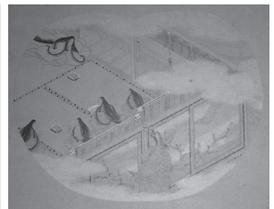
49 宿木



50 東屋



51 浮舟



52 蜻蛉



53 手習



54 夢浮橋